歴史講座 平家物語

今回は、敦盛最後の下りを・・・

パパンパン

都落ちした平家一門は、京都奪還をはかり摂津一の谷・・・現在の神戸市須磨区に陣を敷いていました。源義経率いる源氏の軍勢が、一の谷の背後の崖の上から駆け下りて奇襲攻撃をしかけます。不意をつかれた平家軍は、沖に留めてある船に乗り込もうと、大慌てで逃げ出しました。

またそれを追撃する源氏方も、必死でした。

パンパンパン

源氏方の熊谷次郎直実は一の谷西口の塩屋口を攻めていました。

戦場に一番乗りを果たすも、息子の小次郎直家が左腕に傷を負ったことを心配していました。

また、今回の戦で大きな手柄をまだ立てていないことも心配事のひとつでした。

武士は、手柄を立てる機会が失われてしまいます。

「なんとしてもこの合戦で、敵の名だたる大将を討ち取るのだ！」

熊谷は目をギラギラさせて、海岸沿いに東へ馬を走らせていました。

ふと海のほうを見ると、沖に停泊している平家方の舟に向けて、背中を向けて逃げていく馬に乗った武者の姿があります。パカッパカッパカッ・・・

パンパン

これだと熊谷は声をかけます！

「そこなるは平家の名だたる御大将とお見受けする。敵に背中を見せるとは卑怯なり！返したまえ。返したまえ」扇を上げて招きます。

招かれた方は…そんなもん、無視して行けばいいのですが、名誉を重んじる、武士の世界の話ですから、ザッ！！と止まり、引き返してきます。

波打ち際でむずと組んで、馬から引き落とし、取っ組み合いになります。

上になり・・・下になり・・・大人の世界です。なんて言ってられない！

熊谷が敵の兜を払いのけてみると・・・年の頃16、17。スッと目鼻立ちの整った若者でした。「そもそも、あなたは、いかなるお方ですか。お名乗りください。お助けいたします」

「そういう汝は？」

「名乗るほどの者ではございませんが、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実と申します」

「では汝に対しては名乗るまいぞ。名乗らずとも首をとって人に問え。我を討ち取らば、汝にとってはよい手柄となろう」

熊谷は戸惑います。熊谷にも小次郎という16歳の息子がいます。

（自分は、息子の小次郎がちょっと傷を負っただけで心配でたまらん。ましてこの殿の父は、息子が討たれたと聞いてどれほど悲しまれるだろう…）武士である前に父親ですから、

子を持つ親の気持ちというものが分かる訳です。

「よし！お助けしよう」と、思うのですが、後ろを振り返ると、一の谷西口を攻撃していた土肥実平が、50騎ばかりで押し寄せてきます。

目の前の若者は痛手を負っている、このままではいずれ味方によって討ち取られてしまうだろう、よし、それならば俺が自ら首を取って、後の御菩提をお弔いしようと、熊谷は泣く泣く、その若者の首をはねます。

「ああ何と因果な商売か武士というものは・・情けないことに、討ち取ってしまったなあ」袖を顔に押し当てて、さめざめと泣き入る熊谷。

そうはいっても、とにかく首をつつもうとしているところへ、ふと見ると、首の無い死体の腰のところに笛がささっていました。

「ああ…風流なことだ」熊谷はその笛を見て、つくづく感心します。

「この暁、城塞の中から管弦の音が響いたが、さてはこの人々であったか。

俺たちの味方が何万騎いるかわからないが、戦の陣へ笛を持ち込む、こんな風流を解するものがいるだろうか。

いや、一人もいない。みんな荒くれ者の、無教育な奴ばかりだ。

貴人とは、高貴な方というのは、生まれからして違うなあ」熊谷はしみじみと感じ入って、大将の義経にその首を見せると、その場に並み居る人々は皆、涙を流しました。

後に、この若者が清盛の弟経盛の三男、敦盛だったとわかります。

敦盛最後の一説でした。